



TITLE:

# <批評・紹介> 慶祝蔡元培先生六十五歳論文集下冊

AUTHOR(S):

森, 鹿三

---

CITATION:

森, 鹿三. <批評・紹介> 慶祝蔡元培先生六十五歳論文集下冊. 東洋史研究 1936, 1(5): 464-465

ISSUE DATE:

1936-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/138703>

RIGHT:

## 批評・紹介

### 慶祝蔡元培先生六十五歲論文集下冊

國立中央研究院歷史語言研究所集刊外編第一種  
民國二十四年一月同研究所發行。四六倍版六一〇頁。  
定價上冊と合して十元。

この論文集の上冊は既に數年前に刊行せられたのであるが、下冊はやつと最近に届けられたから、殆んど目次ほどの役目しか果しえないが取敢へずその内容を紹介する。

#### 胡適「陶弘景的眞語攷」

道教の經典である眞語の第二編(甄命授)第二卷中に十幾條、佛典の四十二章經を鈔襲したものゝあることを指摘してゐる。氏の道藏整理第一次の嘗試であるといふ。

#### 梁思永「小屯龍山與仰韶」

安陽後岡に於て發見せられた三つの異つた文化層——即ち河南小屯を以て代表せしめる白陶文化、山東龍山の黑陶文化及び河南仰韶の彩陶文化——の相互關係に對して新しい解釋を與へてゐる。

#### 徐中舒「古代狩獵圖象考」

狩獵圖象のある八個の戰國秦漢期の銅器を中心に、その演進の跡をトレースしたもの、文獻考古學者としての本領を十分に發揮してゐる。殊に虎が委蛇となり、曼衍となる新説の如き、疑義もあらうが面白い。穿鼻環飾、羽人、操蛇之神、鳥首人身等の考へにも創見が多い。

#### 丁山「刑中與中庸」

中及刑の字の本義を考へ、執中とか慎中とかは本來専ら刑罰に就いて言つたものであるが、孔子に至り演繹してその思想體系中に取入れたことを證明してゐる。

#### 容肇祖「燉煌本韓朋賦考」

韓朋賦については既に我が那波利貞先生が『歴史と地理』誌の故内藤湖南博士追憶記念論文集の中に於いて詳しく述べられたが、本論文は別の視野から、丁度顧頡剛が孟姜女故事を研究したのと同様の態度でこの韓朋故事の演化發展を考證したものである。

#### 容庚「宋代吉金書籍述詳」

呂大臨の考古圖を始めとして現在存するもの八、佚せるもの十二、都合二十種の宋代吉金書籍を解題批評せるもの。

## 郭寶鈞「古器釋名」

古器を角壺鼎皿の四つの系統に整理してその起源がすべて自然物に出づることを論じてゐる。

## 翁文灝「古代灌溉工程發展史之一解」

支那古代の灌溉工程は先づ北支平原西部の太行山麓に始まり尋で關中に入り、南は四川に入り、西は寧夏に及び秦漢一統以後に至つては、漢人勢力の中央亞細亞に侵入すると共に此の地にまでも傳播されたことを述ぶ。

## 顧頡剛「兩漢州制考」

漢書地理志の序文には前漢十三州の中に朔方部のあることを言ひながら、本文では朔方部が消滅して、司隸校尉の管領する州が出現してゐる。この矛盾は如何に解決すべきかと提議し、一は前漢の制であり、他は後漢の制であることを班固が混在せることを明快に論證してゐる。

Paul Pelliot, Sur un passage du "Cheng-wou ts'ing

-tcheng lou"

『聖武親征錄中』の幹陳那顏と拙赤解の二語を解したものである。

## ・傅斯年「夷夏東西說」

支那史上に於ける南北の對立に就いては桑原先生が既に

詳審に論じ盡された所であるが、この南北の對立が生ずる以前即ち秦漢の頃まではむしろ東西の對立の方が顯著な歴史事實であつた。之を對象にしたのが傅氏のこの論文である。東方の平原區を代表するものに商と夷があり、西方の高地區を代表するものに夏と周がある。而してこの東西二勢力の隆替する處に古代史が繰り展げられるのであつて、秦對六國・楚漢對秦・平林赤眉對王莽・曹操對袁紹に至るまですべてこの史觀を以て考察されるものであるが、後漢に至つて揚子江流域が開發せられ、三國の吳に至つて江南が一つの政治組織となるに及び、横の對立は縦の對立に移つたといふ。

この外に語言に關する論文等が八種收められてゐる。上に紹介したものと合して凡て十九種。孰れも讀みごたへのもので、夫々専門家の正當なる批判を要請してゐる。

(森 鹿 三)